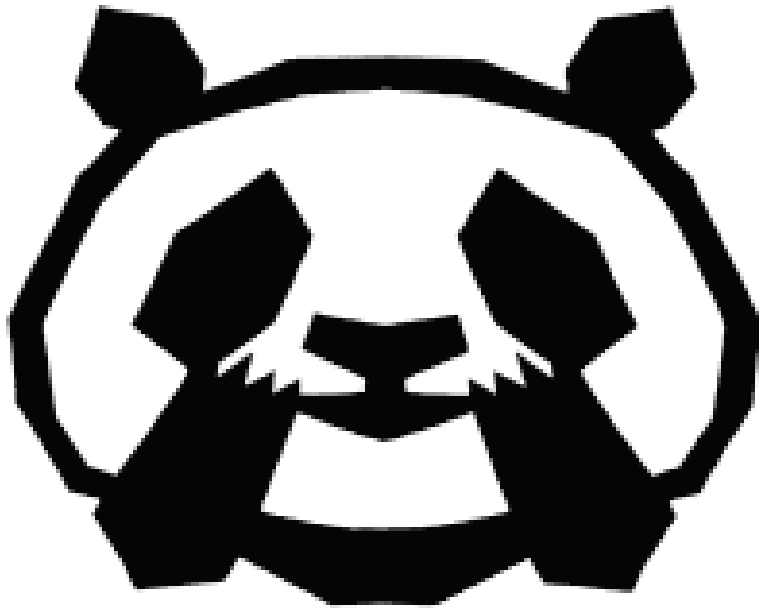


Ⅲ部



現地調査記録

- ・ 日記(9/11～9/18)
- ・ 学生交流@復旦大学
- ・ 企業/機関訪問報告

2011.09.11～09.18

＊現地調査日程／記録＊

(以下、訪問先企業名敬称略)

	年月日	都市名	時間	内 容
1	9/11 (日)	成田 発 上海 着	12:35 15:05 17:20 夜	成田国際空港集合 空路、上海へ(直行便) 上海浦東国際空港到着 夕食後、ホテルチェックイン
2	9/12 (月)	上海	午 前 午 後 夕 刻	上海市内見学 復旦大学との討論会 復旦大学との夕食会
3	9/13 (火)	上海	午 前 午 後 夕 刻	日系企業 [松下能源上海有限公司] 日系企業 [三井住友銀行] 夕食 (如水会上海支部との食事会)
4	9/14 (水)	蘇州 北京	午 前 午 後 18:30 21:05	蘇州工業園區日系企業 [日立] 市内見学、実施調査 [蘇州工業園區] 国内線にて、空路、北京へ 北京到着
5	9/15 (木)	北京	午 前 午 後	IMF 中国事務所 訪問 JICA 中国事務所 訪問
6	9/16 (金)	北京	午 前 午 後 夜	人民銀行 訪問 財政部 訪問 夕食 (如水会北京支部との食事会)
7	9/17 (土)	北京	終日	市内見学 (天安門広場、故宮博物館、万里の長城)
8	9/18 (日)	北京 発 成田 着	9:25 13:55	北京首都国際空港到着、搭乗手続き 成田国際空港 到着



Day1 9.11

内野 琢郎

旅行初日の日記を印象的であった場所を紹介することで書いて行きます。

・上海浦東空港

上海浦東空港はとても近代的な空港でした。また広さに関しても日本の成田空港が足元にも及ばないほどの敷地面積でした。ここで、出迎えてくれたガイドの歩さんが上海での生活のバックアップをしてくれて本当に助かりました。



・上海のレストラン(リバーサイド)

上海についてから一番初めに行った場所です。一番衝撃だったのは、ここで、結婚式が行われていたのですが、招待客の卓の間を平然とよその客(自分達)が縫って行けることです。結婚式にも中国の他人を気にしない文化が表れているのだなと感じました。ちなみに、料理に関しては自分の予想を大きく上回るおいしさでした。(この時はこれから円卓地獄が続く事は知らなかった...)

・上海の川

中国のTV棟(球がたくさんついている棟)や森ビルなど中国の発展を一望できる川です。ここから、上海の金融街や、高層ビルを望むことができました。特に、印象的だったのが、ネオンが至るところで付いており、東京

が田舎のように感じるぐらい煌びやかだった事です。その絢爛さを目に焼き付けるとともに中国の経済成長の勢いを感じました。また、川沿いを歩いている際にも、フォードやベンツ、BMWなどの高級車を非常に多く見つけ、中国の富裕層が増えてきている事も肌で実感することができました。



・コンビニ

コンビニは意外にも日本と比べて狭い店が一般的でした。ファミリーマートやセブンイレブンもありましたが、「磯の味アイス」など商品は現地化されて中国人の舌に合ったものが多かった印象です。また、サントリーの黒ウーロン茶が6元(約90円)である(日本では160円)一方で、日本のお菓子などは日本の価格と変わらないほどで売られていたり、物価は日中の値段を比較した際に商品ごとによって変動することに気がつきました。(これも中国消費者の価値観に合わせた価格付けなのでしょうか。)



Day 3 9.13

兼国 彩香

移動は貸し切りバスで。ホテル前にスタンバイしていたバスを見てびっくり。30 人は入りそうな大型バス、座席はソファで座り心地○。「バブリー(バブル)だ!」とみんなでテンション上がります。車内から見える高層ビルの数々に圧倒される。クラクションはあいさつ代わりにのかあちこちでブー! っと大きな音が聞こえる。道行く車は外車が多く、どれもピカピカに磨きあげられている。

始めに向かったのは豫園。上海の観光名所で、「豫」は愉を示し、すなわち「楽しい園」という意味だそう。面積は約 2 万 m²。個人の庭園。1577 年明の時代に完成。

バスを降り豫園商城に向かう。豫園に隣接する商業地で、“The 中国”な建物(私のイメージでは)がずらり。凝った装飾が施された建物を眺めるうちに中国に来たという実感がわく。食べ物やお土産を売るお店が入っている。



ココナッツの実やストローの刺さった小龍包など珍しいものに気を惹かれつつ奥へ進む。



豫園商城の中国の伝統的な建物の間からは高層ビルが見えた。中国の人は「旧上海」「新上海」と呼ぶそうだ。この日は中秋節(日本の十五夜)で祝日ということもあり、非常に混んでいた。

赤を基調とした建物が並ぶ豫園商城からシックな雰囲気のある建物が建つ豫園へ。池があり、山があり、竹林があり、その周りの回廊を通して中へ進む。回廊の途中に休憩所のような場所があり、振り返ると鏡が備えつけられていた。お姫様が鏡の前に座り鏡に映った男性と見合いをするか決めるそう。粋です。



午後からは復旦大学との交流。まず学生方に大学の構内を案内してもらおう。規模の大きさに驚く。まず門をはいって目についたのが毛沢東の銅像。大きい…。そして新宿とか渋谷とかにありそうな 32 階建ての建物。国立にあったらさぞかし目立つだろう。日本研究館というどころなく和風な建物も。研究ごとに建物を立ててしまうのはすごい。大学院生との討論会は別ページで詳しくあるので割愛。



夜は復旦大学の学生と食事会。見た目はパチンコ屋、入るとカラオケみたいになっていて(個室になっているので)ここは…?と思ったが、出てくる料理はどれも豪華でおいしかった。ウーロン茶が甘くて驚いた。甘党の私が飲みきれなかったのが相当甘いと保証します。ビールを頼んだ。

注ぎ足し頻度: シシュマハルのお冷なみ。後タトイレに行きたくなる。



食事が終わって外へ出ると満月が。復旦大学の学生の方たちが夜の上海を案内してくださるとのこと。満月の下、20分くらい歩いた。意外と人通りは少なく、おしゃべりに花が咲く。連れて行ってくれたのはデパートのような商業施設。22時までやっているようだ。次の日が平日ということもあってか人通りはまばら。スターバックスで月餅が売っていた。中国オリジナルのタンブラーを見るものの誰も買わず。服や靴、雑貨をウィンドウショッピング。ルミネのような雰囲気でも物価は日本とそれほど変わらなかった。



地下鉄でホテルまで帰る予定が、なんと終電を逃してしまったらしい。まだ22時半なのに、上海の人は健全である。結局バスで帰る。路上駐車がなくてバス停にバスは止まらず並んでいてもどンドンぬかされていく。圧倒されつつ乗り込んで無事ホテルに到着した。バス代は2元(24円くらい)で非常に安かった。ホテルの前まで復旦大学の学生が送ってくれた。ありがとうございました。



※終電逃すも意に介さないゼミ幹

初日から中国人のエネルギーの大きさに触れた密度の濃い一日だった。

Day? 9.13

豊田 美生子

上海3日目の朝、ホテルで優雅に朝を迎えるはずが…モーニングコールが鳴らず、起床して30分で準備して8時ロビー集合。朝からわたわた。朝ごはん食べられなかったけど、2日間の中華料理生活で胃がもたれていたのでもちよいいかも。

さあ今日から企業訪問や政府機関訪問が始まる!!いいよいか〜と若干緊張ぎみな一同は、最初の訪問先である松下能源有限公司(パナソニック エナジー社)へ…。今回の訪問を企業側に交渉してくださった弁護士の斉藤さん(70歳!)が、中国での弁護士生活をお話してくださった。とても70歳には見えないほど若々しく、エネルギッシュな方。「人生で今が一番楽しい」と自信を持って話される姿が、とても眩しい。外の景色をながめっていると道路脇の木々の間からときおり古びた建物の街並みがちらほら…都心とは真逆の建物。これが中国の格差なのかな…。

さてそうこうしているうちにエナジー社へ到着。入口には「一橋大学熱烈歓迎!」の文字が!!みんな感動のあまり写真を撮りまくる(笑)。パナソニック全体の紹介のあと、エナジー社の中国での具体的な業務を説明していただく。ここでは主に電池の製造・販売、電池の梱包を行っているそう。しかし「世界の工場」としての中国の価値は進出当初に比べてだいぶ下がっているのだとか。沿岸部の土地価格の高騰に、労働賃金の急激な上昇、安い労働力で安い製品をつくることは難しいようだ。それでも中国市場の価値はどんどん上昇中!その一方で安全や品質よりも、安さが求められている中国市場で日本企業は苦戦しているらしい。でも「安全・品質」だけは絶対に譲れないというもののづくりにこだわる姿勢が、中国で認められる日がきっとくるよね。



昼食後(飲茶!)次の訪問先まで時間があるので、ガイドの木さんの案内で森ビルの世界で一番高い展望台を観光することに!地上からビルの頂上を見上げると首が…痛い…(泣)。たつたつつかい!!100階(最上階)からは上海の街並みが一望できる。日本よりもはるかに高いビルが立ち並ぶ街並み…これで発展途上国だなんて信じられないな。まだまだ大きくなるぞー!という気合いが街全体から感じられる。



その後女子はみんな街を見下ろせるトイレで記念撮影(笑)!TOTOのトイレの偉大さを感じながら、展望台をあとに。



さて楽しんだ後は、日系企業2社目の三井住友銀行中国有限公司を訪問。実は私にとっては、この三井住友銀行が海外研修の第一の関門。というのも所属する部のOBの計らいで、中国に行く前に三井住友銀行本社を訪問させていただき、大変ありがたいことに中国有限公司の会長であり、常務執行役員の大久保さんにお話をうかがわせていただいたのだ。事前にお話をうかがっている以上、下手な質問をするわけにはいかない…。き…緊張する一!!

そんな状態で今回お話をしてくださる中国有限公司の蘭田さんにお会いする。「内海さんと大久保常務からうかがっています」とご挨拶してくださる。恐縮です…。大久保さん、内海さん、お気遣いいただきありがとうございます。蘭田さんは国内の企業調査部で活躍された後、海外勤務をずっと志望し続け、香港へ駐在、その後中国市場への興味から中国へ企業調査部を立ち上げたという、とてもアグレッシブな方。私たちの関心事をすべて網羅するため、スピーディかつ分かりやすく話していただいた。



特に興味深かったのが、中国で「三井住友銀行としてのメリット」をどのように発揮するのが難しいというお話だった。1社目のパナソニックでも感じたが、日本企業の中国市場での一番の課題は、どのように自社のメリットを売り込んでいくのかということのようだ。グローバル社会で企業が生き残っていくためには、これまでの日本的経営からグローバル基準にあわせた企業として変化していかなければいけないのだと強く実感する。また同時に中国人女性の方が活躍されていて、とても輝いて

いらっしやったのが印象的。私もがんばろう!!

今日一日お会いした方々が全員、本当に魅力的な方たちばかりで一人バスの中で余韻に浸る。そして如水会上海支部の方々との食事会へ…。たくさんのOBの方々が集まってくださり、楽しく会食!OBの方々も個性豊かな方たちばかり、就職せずに中国に留学し、その後自力で仕事を見つけた方や、上海で公認会計士をしていらっしやる方など本当に貴重なお話をうかがうことができた。人生を豊かに生きるためには、うちにこもらず外の世界へ足を踏み出していくことが大切なのだと、実感させられた。そして会食後は若手OBさんに連れられて上海のバブリーな夜の街へ(笑)。



たった一日の出来事とは思えないぐらい充実した一日だったな一!!明日でもう上海ともお別れか…明日も充実した日になりますよーに。

Day4 9.14

朱 青

今日は大遷移の日。上海→蘇州→上海→北京。日程を聞くだけで疲れるな。

6 時。モーニングコールが来た。眠い…寝たい…が！頑張って起きろ！今日こそ上海とさようならだ！と思ったら、なんかおなかの調子がヤバイ…やはり四川料理が激しすぎか…でも昨日のバーが楽しかったな…と混乱な意識。

7 時半。ロビー集合。チェックアウト。朝ご飯食べなかったな…「おはよー」とあんまり元気のない挨拶をした後、皆に聞いてやはり大半がおなか下していた…さやちゃんから薬をいただきさっそく飲む！さやちゃんありがとう！このご恩は一生忘れない！よーし！これから2時間のバス移動！っと寝よう…シーンなバス内。

10 時。蘇州工業園區一日立電線商貿有限公司に着いた。これから二時間の訪問。講演者は中国人で日本語めっちゃうまい。日立って iphone の電池を作っているのをはじめて知った。びっくり。

12 時。昼食。蘇州城市飯店。まともな上海料理ね！と思ってここで飲食を控えよう！これおなかに優しいそうね！と皆が取捨選択でお昼を進めた。お昼が終わったら市内見学って言ってもバスを乗って帰り途の両側の風景を眺めるだけ。蘇州工業園區というより高級マンション園區みたい。途中にバスから降りて蘇州工業園區の特徴的である不明な赤い彫像と一緒に写真を撮った。また2時間の上海帰りのバス移動…また寝よう…



16 時。上海到着。晩御飯@图安蟹味館。食の間隔が短かったんでそんなに食べられなかった。蟹が有名ならしいレストランなのに蟹がなくてとても残念…

17 時半。上海虹橋空港到着。搭乗手続き。三日間短かったが上海は本当に楽しかった！皆で一番叫んでたのは「上海はバブリ！だよな」。歩さん(ガイドさん)、お世話になりました、ありがとうございました！またいつか縁があれば会いましょう！上海さようなら！



21 時。北京首都国際空港に着いた。現地ガイドの葛さんと出会い。日本語の上手さと人の良さに二重にびっくり。マイクロバスで北京市内に移動。さすがにこの段階まで来て皆が疲れてきたよな。窓外の夜景を眺めながら葛さんの紹介を聞く。北京の自動車制限って半端ないな！販売量を制限するだけでなく走行可の車両も車番号で管理されてる。上海の夜景と比べると明らかに北京の方が暗いな。イルミネーションが少なく、バブリの感じがしない。笑。

22 時。ホテル着。その王府井のとなりだおお！300メートルぐらいで着けるんだおお！皆でわくわく～天安門も歩きで20分！場所的に無敵！と思ってたら、一日の移動で疲れた私たちは早速翌日の集合時間を聞いたらずぐに部屋にチェックイン。

これから四日間、北京よろしく！

おやすみなさい！

Day 9.15

中尾 実貴

北京研修初日! 夜ばらばらと雨が降ったからか、昨日の到着時と比べびっくりするくらい空気が綺麗、澄んでいます。今日はいよいよ国際機関への訪問で、心なしかみんな今までに無く緊張しているような…(ちなみに私はどきどきしていました)

バスに乗り込み、30分程度で IMF に到着しました。

IMF で対応して頂いた Lee さんはとても気さくな方で、私たちの途切れることなき質問にもとても丁寧に答えてくださいました。(詳細はレポート参照!) 事実、大変優秀なキャリアをお持ちで、数少ないアジアにおける IMF 職員のそのまた精鋭の方のようです。印象に残ったのは “We are positive, and I am positive” との言葉。もちろん長い目で見ることは大事ですが、あらゆる不安を心配してそれを排除するために最初から可能性を切り捨てては、チャンスもチャンスにならないなあ、と実感。

一方で、短期的にでて分かりやすい効果を重視して、それがそのまま長期的にも納得のいく結末に導かれるよう調整する能力を持ち、常にバランスをとることも大切。これって言うは易いけど、行うが難し難し超難しですね。そんな IMF の方針と個人的な進路を重ねていろいろと考えてしまいました。Lee さんですが、(中国人の朱さんも言っていた!) 今回研修でお会いした数々の識者の方の中でも本当に素晴らしく、まず感じたのは、発展しつつも数々の問題が指摘される中国という国を客観的に見ることができているということです。特に中国の IMF は、中国における機関というよりは世界の、そしてとりわけアジア帯の経済状況に常に目を向けなければいけないため、そのように広い視点が必要なのかもしれません。う～んかっこよかったな～。憧れます。

興奮冷めやらぬまま IMF を出て、昼食は飲茶^^
研修前に中国で食べたい食べ物を聞かれたとき「やむちや(・∀・)！」と即答した私、超ハッピー。野菜まんお

いしかったなあ。クリームパンみたいなデザートまんもありました。また食べたい。

近くにちょっとした公園があり、池に鯉がたくさんいたので戯れてみました。餌を買って池に放り込むとたくさんの鯉が優雅に…戯れ……Σ(㉨)!!!! 何匹いるの!



…遊びも束の間、続いて JICA 訪問です。日本は中国にも多く開発援助を行っており、外務省の政策決定に基づいてその主要な任務を行っているのが JICA。オフィスには中国語でかかれたたくさんのメッセージ、とりわけ東日本大震災に対するエールが飾られていて、実際に現地で生の声を見聞きするインパクトを垣間見たように思います。「政策」というと少し堅苦しく、いかにも規律に基づいた印象を受けますが、現場ではそこにいる人と人との交流がそこそこあるようで、見ていてなんだか暖かい気持ちになりました。事業内容の資料の入ったクリアファイルには、日本代表・トキと中国代表・パンダのオリジナルキャラクタープリントが。かわいい。



実は今回の中国ゼミには JICA 内定者2人(!)、そして復旦大学との交流に向けて開発援助をテーマに勉強してきたメンバー3人(私を含む^^)と、JICA が掲げる大きな事業内容である「途上国援助」に関心のある人が多いんです。それぞれが個人レベルで気になっていたことが聞ける良い機会になったと思います。個人的には、政策の意思決定(外務省)と実行機関(JICA)の役割・権限の棲み分けに関してお聞きできて良かったと思っています。

夕食まで少し時間があつたので、バスガイドの葛さんに茶芸館に連れて行ってもらいました！観光客や修学旅行の学生がよくいくところのようで、お茶を出すお姉さんの日本語がめちゃくちゃ達者。「ウーロン茶は3番茶と4番茶と7番茶がいったば一応おいしいのでさーよーなーらーと覚えてくださいネ！」だそうです。小さいコップとはいえウーロン茶、ジャスミン茶など五種類も飲ませていただき、お腹が洗われた感じ。今回出会った中国人でも、やはり観光客が多く行く場所にいる人は日本語(しかも呼び込み系の)がとっても達者で、商売人精神を感じてしまいました。(「カワイイネ！」って言えばいいと思って…嬉しいじゃないの！←)そんな商売人に負けてお茶セットを買ってしまった私。おいしく飲んでます旦那(・_・)



そんな15日の夕食は中国の四川料理！そう、四川料理…すでに上海の如水会食事会での四川料理に数名がやられていた私たち、戦いに挑む気持ちで料亭に乗り込みました、が。北京での四川料理はおなかに程よく優しく、そんなに辛くありませんでした^^それとも舌が慣れたかな？



ホテルの近くは有名なショッピング街です。屋台もあれば高級ホテル・デパートそしてマクドナルドまであります。せっかくなのでみんなで観光することに。

お食事系屋台にはおいしいような飲茶(だいすき)からさそり・ひとでまで様々…動いている虫が串刺しになっていてびっくり。



お土産系屋台では至るところで値切りの攻防が続いていました。私も初値切りに挑戦^^3分の1まで下げて大喜びしちやいましたが頑張れば5分の1まで下がるらしい…日本人は、もはや世界的に、あまり値切らないおいしいお客さんとして有名なのです。もっとアグレッシブに値切ろうと思います。(リベンジは最終日に続く。)10時にイルミネーションが消灯する上海のごとく、9時にはデパート、10時にはあらゆる夜店も閉まってしまいます。明日もあるので、みんなで黒ウーロン茶を買い込んでホテルへ。

明日は最終日にして人民銀行、財政部、如水会北京支部食事会と大物勢ぞろい。夜のガールズトークもそこに早めの就寝(^^)

Day6 9.16

津覇 ゆうい

この日は企業訪問のクライマックス。人民銀行と財政部を訪問させていただきました。これまで訪問させてもらった企業や機関の経済活動も、この両機関の意思を無視しては成立しません。お話のなかでも何度もその名前を聞き、影響の大きさを日々実感していました。特異な経済システムを管理し、中国をこれほどまでに成長させてきた両機関は私たちにはあまりにもミステリアス。パスは緊張感でいっぱいでした。

午前には人民銀行、威厳を感じさせる建物にびびり、警備員の銃にびびり、スパイ映画のようなストーリーを妄想する始末。そんななかプレゼンに現れたのはなんとまあ、柔らかな雰囲気でありながら鋭い気品を放つお婆さまでした。インタビューの詳細は他項にゆずりますが、中国の成長とその適応、金融政策、インフレについて非常に易しい英語で丁寧に説明してくださりました。元の為替レートがどれだけ人民銀行を悩ませているのか実感できました。

午後は、最後の機関訪問、財政部でした。皆、中華料理に少し疲れてしまった胃と慣れない英語に悲鳴をあげる脳に喝を入れ、ばっちこいや！とばかりに着席。非常に心あたかな男性職員3人が出迎えてくださいました。財政部の仕組みや、政府の支出、これからの戦略についてわかりやすく説明してくださりました。中国も日本と同様に少子高齢化を懸念するなど、保険の拡大や農業の保護は日本と共通した課題でした。他国との経済協力についても成長と安定を目指した外交政策をとっていることを伺いました。こちらも詳細は別項に譲ります。

財政部の訪問を終えた瞬間、皆一気に肩の荷が下りました。いちばん笑顔になったのは劉先生。このような機関を訪れる貴重な機会をえられたのも先生の人柄と尽力のおかげです。心労をおかけしました。先生の笑顔に私たちもうれしくなりました。



その後は夕食のレストランまで移動。夕食の時間までレストランの前の公園で自由時間。数名は、タンデム自転車(サドルが3つ連なり、同時に3人でこぐ自転車)を借りて公園内を探走。下町や飲屋街は別世界に來たみたいで「すごい」しか言えませんでした。公園内の湖を泳ぐ方や鉄棒で雑技団並の技を決めるおじ様方に、中国のパワーをもらいました。



お腹がすいたところで、如水会の方々とお食事をしました。皆、日本の経済を元気にしたい、と熱い意思を語ってくださる姿はカッコよく、自分もこうなってやる！と鼓舞されました。

ビビってた政府機関の訪問を無事乗り切ったあとに食べたご飯はとてもおいしかったです。みんなよく頑張りました。

Day7 9.17

油谷 さやか

昨日まででお勉強は終わり！ということで今日は1日北京観光です！

前日夜の雨で北京の淀んだ空もすっきりと真っ青な青空に。これこそ北京的秋天？

まずは天安門広場へ。毛沢東の肖像で有名な天安門の前に広がる、南北 880m 東西 500m の世界最大の広場。世界最大というだけあって、本当に広い。最大で 50 万人を収容できるそう。そのため国家歴史的イベントの舞台にもなりました。中華人民共和国の成立が宣言されたのも天安門の上。そんな天安門に向かって広場の左側にディズニーランドも真っ青な長々とした列が！これは毛主席記念堂に収容されている毛沢東の遺体を一目見ようとする人たちの列。進んでも進んでも人々でびっくり。



天安門を抜けた先はいよいよ紫禁城。元代につくられたものを明代の永楽帝が改築し、南京から北京に遷都してから清朝滅亡まで 500 年程皇帝の居城として使われていました。故宮博物院というものの、中の貴重な財宝は国共内戦の際に国民党が台湾に持って行ってしまったので主な見どころは建物のみ。といっても英語名が Forbidden City というだけあって、Palace の域を越えてもはや City と言っていいほどに広大。とにかく広い！くぐってもくぐっても門！歩いても歩いても赤い壁！ガイドさんのお話によると、城内に盗みに入ったどろぼうが

城内で迷子になって外に出られなくなってしまう餓死したともあるみたい。(真偽の程は??)



紫禁城を後にし、向かったのは万里の長城。しかし途中で名物の渋滞に巻き込まれる。なんでも北京から郊外に向かう高速道路は数が少なく、みんなここを通るのだそう。周りはトラックばかり。そしてふと後ろを振り返ってびっくり！なんと車に乗っている人たちがそれぞれ道路に降りてふらふらしている！これは中国では普通の光景なんだって。でもずっと座ってたら疲れちゃうし、リフレッシュできていいのかもしれない。



そして着きました、万里の長城！山々に万里の長城がすらすらと伸びている姿は圧巻。いよいよ長城の上を歩き始めるが、歩くというよりもはや登山。かなり急で段差の高さが統一されていない階段を登るのは一苦労。そんなに気温の高い日ではなかったけれど、すぐに汗がだらだらと流れてくる。でもある程度まで登ったところから下を見下ろすと、他の山の長城や石造りの建物の

素晴らしい景色が見えてここまで登ってよかったと思うのです。下りは下が見えることもあって怖いし足がぐがぐして、上り以上に大変でした。ちなみに私は帰国後、これが原因で膝が痛くなり数日間階段が登れなくなりましたとさ。



そして中国最後の晩ご飯は待ちに待った北京ダック！！目の前でコックさんがダックをカットしてくれて、それをネギやキュウリや香辛料などと一緒に小麦粉からできた皮に巻いて食べます。これが本当に美味！ぱりぱりとしたダックの皮とやわらかいお肉が濃厚なソースと一緒に、もちっとした皮に包まれて、それを一気に口に入れると、、、もう極楽です。みんな毎食の中華料理に飽き飽きしていたものの、このときはどんどん回転テーブルを回して食べていました。



ホテルに帰った後は王府井で最後のお買い物。デパ地下を散策したり路地の露店で中国語を使って値引き交渉を試みたり、と思い思いに北京最後の夜を楽しみました♪



※万里の長城を登る



※最後の晩餐^^



※デパ地下でお買い物



※お買い上げ♪

Day 9.18

平川 星座

とうとう中国とお別れの日がやってきました。起床時間はなんと5時半！無心の荷造りを終え6時半、眠気と共にバスに乗り込みました。バスの中では、ホテルから頂いたお弁当が朝ご飯に。連日の豪華な中華料理に胃をびっくりさせてしまい、すっかり黒烏龍茶とも親友になれた私達。「よもや中華料理か！？」とドキドキしながらお弁当をのぞき込むと、その中身は…。シンプル・イズ・ザ・ベスト！なパン！サンドイッチ！ソーセージ！たまご！お水！！思わず歓声を上げる中国調査隊でした。

そして来た時とは異なるターミナルへ到着。龍と亀をイメージした外観を持ち、その美しさは思わず「日本負けたー」という声上がるほど。メンバー同感動に浸りながらターミナルの中へ。ついに葛さんともお別れです。名残惜しそうに1人1人握手をすると、葛さんは「また北京に来たら電話して下さい。すぐに自家用車で迎えに行きますから」とにっこり。葛さん大好き！楽しいガイドをありがとうございました！



その後飛行機が2時間遅れ、急遽ショッピングの時間に。人民元を減らすため免税店を徘徊しました。(笑生ちゃんのおかげで、私もギターパンダのストラップをゲット！)そうこうするうちに搭乗時間に。

きっと一人一人がこの一週間の出来事、出会い、その中で得たもの、これから何をすべきなのか、機内で思索にふけたことでしょう。そしてついに故郷日本へ到着しました。空港の「おかえりなさい」というひらがなの優しさに心を和ませながら、それぞれ帰路へつくのでした。

皆さん、本当にお疲れ様でした～！！



※搭乗前



※帰国！



SHANGHAI*

上海最終夜は如水会上海支部の方々との会食で、四川料理に舌鼓を打ちました。円卓テーブルに腰をかけ、皆が見つめるその中心に、次々と運ばれてくる多種多様な大皿料理。この中国独自と言える食事スタイルは、より一層宴を盛り上げます。更に中国雑技の変面ショーも行われ、会は四川料理に負けないほどの刺激的なものとなりました。

会食は、まず学生時の部活動やサークル、ゼミの話で盛り上がり、時が経過しても変わらない一橋について知れるとともに、今の私たちでは想像もつかないユニークなお話について伺うことが出来ました。

また、世界が注目している経済都市上海での生活やビジネスの実際について、先輩方からリアルな声を伺うことができたのは大変貴重な経験でした。一筋縄ではいかない中国ビジネスに苦労しながらも、仕事にやりがいを感じ充実した日々を送っているというお話は大変印象的でした。世界の最前線で活躍されている先輩方の姿は格好よく、同時に誇らしくもありました。



一橋大学の先輩方との食事会@上海



中国の地酒である白酒も進み、宴もたけなわとなったところで、最後に我が校の校歌を皆で歌い、会を盛大に締めくくりました。

この会を通じ、海外でのキャリアについて考えさせられたのはもちろん、異国でも深い繋がりを持っている如水会のネットワークを肌で感じることができ、一橋生として大変嬉しいものとなりました。



BEIJING*

企業・機関訪問も無事全ておわり、中国如水会北京支部との食事会に招かれました。

都心を少し外れた湖は、その周囲をお洒落なバーやレストランが囲むちょっとした隠れグルメスポットの様相。その一角にある料亭での会となりました。

ここでも先輩方のバックグラウンドは様々で、教授として中国人の学生に教えている方や、中国人留学生として一橋大学を卒業された方、外交官であり在中駐在員として働かれている方、そしてもちろん有名企業の中国支部・中国法人で勤務されている方など多くの方とお会いしました。

未熟ながら、学生たちにも一人ひとり、今回の研修に参加した理由と、研修を終え中国に抱いた印象を含めた自己紹介の機会を与えていただきました。研修を一通り終え再度言葉にする事で、それぞれが持つ異なる価値観に基づいて抱いた異なる印象を聞くことができました。

印象的だったのは、「今の中国はいつ来ても驚くくらい変わっている。日本はいつ行っても驚くくらい変わらない」という言葉でした。その善し悪しはさておき、確かに中国は今めまぐるしい変化の時を迎えています。私たちが見た一時の中国も、また時間を置いて訪れれば随分と変わっていることでしょう。

また、在中外交官の山崎さんには、中国で改めて実感した「前提」の違い（文化をはじめ、常識や価値観が異なっていること）から、交渉の現場でフラストレーションが生まれることはないかお聞きしました。というのも、研修を振り返ったとき、復旦大学の学生や省庁の方など中国の方とお話するとき、事実としての情報は同じものを共有しているのに、どうも価値基準が噛み合わず、互いに説得・納得できずに終わってしまい、たびたび悔しい思いをしたからです。「それはやはり経験と感覚でやっていくしかない、僕も若いときは何度も失敗した」という答えには、積み重ねられた「経験」に裏付けられた威厳を感じました。

一橋大学の先輩方との食事会@北京

これは山崎さんだけでなく、今回中国で勤務される先輩方にお会いし、たびたび思ったことでした。

最後になりますが、お忙しい中集まっていただき、お話を聞かせてくださった先輩方には感謝の気持ちでいっぱいです。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

※写真下…梨のお酒。





学生交流レポート

～復旦大学経済学院にて～



2011.09.12

Time Schedule

12:00-13:00	Campus tour
13:00-17:00	Symposium
13:00-13:15	Welcome remarks
13:15-13:30	Grouping by topics, self- introduction
13:30-15:00	Group discussion
15:00-15:30	Tea break (photos and desserts)
15:30-16:30	20-minute presentation * 3-groups
16:30-17:00	5-10 minutes comments of each sub-group on its counterpart's presentation
17:00 ~	Exchanging presents and contact information.
17:00-night	Dinner party

～経済班～

メンバー： Charin、飯山、朱、油谷

(A Comparison of High Economic Growth Periods of China and Japan)

1. 一橋大プレゼン概要

経済班では日本と中国の経済成長が似通っていることに注目し、お互いの経済成長の比較とそれに伴う問題点を洗い出し、中国へ日本の経験をふまえた政策提言を行った。

まず経済成長の要因を労働力、投資、技術、輸出主導型経済の4つに分けて日中の共通点、相違点を指摘した。労働力の観点では、人口ボーナス期の豊富な労働力と義務教育制度による労働生産性の高さが共通していたが、中国特有の戸籍制度が農村と都市の間の人口移動を制限していることが大きく日本と異なっている。投資の面では日中共に貯蓄率が上昇、しかし技術の面では日本は国内で技術力を高めてきたのに対し、中国では外国の技術を導入してきた。輸出主導についてはどちらも固定相場制の下、輸出で大きな利益をあげた。

そして高度経済成長に伴う問題点としては、深刻なインフレ、経済成長を持続させるだけのエネルギーをいかに継続的に確保するかという問題、また格差の拡大が挙げられた。

以上のことをふまえ、格差問題においては戸籍制度や社会保障制度の改革、高齢化社会問題においては退職年齢の引き上げや一人っ子政策の見直しなどの財源確保と社会保障制度改革、国内需要創出については輸出頼りの経済からの脱却と変動相場制への移行、国際競争力については先進技術の導入、新興市場への進出、などを将来の中国へ向けて提言した。

2. 復旦大プレゼン概要

復旦大学の学生側は我がグループのプレゼンテーションに出てきた中国経済に関する諸問題を、次のように取り上げて、プレゼンテーションを進めた。

①インフレーション

中国経済に起こっているインフレーションは中国の各国に対する圧倒的な貿易黒字から生じているものでもあると指摘している。バランスの取れない外貨の流入が人民元に替えられ、市場に流れ込む。その上、人民元の増価の期待もいっそう状況を深刻化させていると述べている。

更に、先進国に匹敵する規模の経済を持ちながら、金融市場が十分効率的に機能していないことも、上海など都会における不動産バブルに繋がっていると主張している。それに対し、中国政府は、不動産の購買制限などバブル対策に働きかけているという。

②格差問題

格差問題を解決するには、戸籍制度の改善が必要であることは両者の意見が一致した。それに加え、復旦大学の学生側は深刻化しているインフレーションは格差問題を悪化させていると指摘している。最近多発したインフレーションに対するデモはその実態を語っている。すなわち、格差が広がる一方、物価が高騰し、最低限の生活ができない低所得者が出てきているという。

③国際競争力

両者のプレゼンテーションでは、人民元の増価は免れないことを認めている。しかし、復旦大学の学生側は中国政府が急激な増価を進めないことをこのように説明した。「中国の世界的ブランドを知っているか」という質問から議論を展開した。つまり、現在の中国の産業は世界と争える競争力を保持していなく、安価の優位と貿易黒字の原動力を通じて国内産業を上達させるべきだと述べている。

3. ディスカッション内容

我々経済班の発表に基づき、中国と日本の経済・社会問題等についてディスカッションをした。主にあげられた問題は中国自動車事故、不動産バブル、インフレーション、格差、エネルギー問題について。

まずは、復旦大学の班の学生たちは中国鉄道事故について話した。7月に起こった中国鉄道追突事故は死者40人、負傷者多数という重大交通事故だった。しかし、事故後の中国政府の扱い方が世間に強く批判された。わずか2日間で救出作業を終わらせ、死亡人数の隠蔽、事故に遭った動車車両を事故現場で埋めたというあり得ない処理方法だった。比較としては、日本の3.11大震災後の震災後政府動向と比べてみた。半年経った後、依然として救出作業を行っている日本と比べて、中国政府の迅速的な強制管理対応が優れているかもしれないが、救出第一・命への尊重が一番の面では、日本を見習う必要があるだろう。

次に不動産バブル問題についても熱く語った。日本と中国はともに高度経済成長期に不動産価格高騰という現象が現れた。相違点としては日本が20世紀90年代初期にバブル崩壊し、景気低迷に落ちる一方、中国の不動産価格はバブルかどうかの定義が難しいという点である。中国の不動産価格対賃金比は日本の高度経済成長期より深刻で、一般市民は住宅を買えない現状がある。国家のマクロコントロール策が近年公表されたが、不動産価格高騰問題は依然として中国の重大経済問題である。

最後に重点として格差問題についても両国の現状に基づきディスカッションを行った。日本は格差社会と呼ばれているが、復旦大学の学生たちから中国の格差現状を深く理解することができた。中国は東から西まで地理で3つの階層に分かれて、富の階層ともいえる。東の発展している大都市と比べて、西の内陸部は比較的に貧乏である。また、中国には95%の富は5%の人の手にあるという説もある。

以上のことにより、復旦大学とのディスカッションに通じて、我々の班は中国経済・社会現状を把握でき、日本の事情と比べる上で、良い交流となった。



4. 感想

戦後の高度経済成長からバブル崩壊を経て、現在の日本は「課題先進国」として位置づけられている。日本の姿は未来の地球の姿であり、日本が抱える課題は、未来の世界が抱える課題である。もちろん中国もその例外ではなく、経済を梃子にした国力の増加は、格差問題や不動産価格の高騰、環境問題、高齢化等のまさに日本が直面した（している）諸問題発生の温床となっている。

今回私たちは、日本のこれまでの経験を基に、中国経済の現状と今後について復旦大学の学生とディスカッションを行うことで、過去の学びから将来を思考するヒントを得ることを狙いとした。中国に関する情報収集に悩まされた点（開示されている情報が少ない）や、学生のバックグラウンドに差があった点（復旦側は金融専攻の院生であり、一橋側は商・経済・社会学専攻の学部生）などディスカッションをする上での不都合はあったものの、当初想定していたものは概ね達成されたのではないと思う。

日本と中国のケースの違いに注意しながら、両国が直面している課題や今後歩むべき方向性について互いに理解し、コンセンサスを取れた事は大きな収穫である。そしてこの機会を通じ、復旦大学生との間に、ディスカッションをしたという事実以上の繋がりが出来たことに意味を感じる。欧米経済が不安視される中で、アジア経済が強い注目をされているが、その重要性を理解し互いに切磋琢磨できる関係であり続けたい。

ABOUT FUDAN UNIVERSITY

復旦大学は「復旦公学」を前身として 1905 年に創設された、100 余年の歴史を誇る中国の名門大学です。復旦の名称は「尚書大伝・虞夏伝」にある「日月光華、旦復旦今」から取られました。（意味：自分を向上させることを怠らない）

復旦大学には文理合わせて 29 の学部があります。復旦大学の学生数は 5 万人で、その 2 割が大学院生です。また、外国人留学生も 3,000 人近く在籍しています。復旦大学の教職員は 2,500 人で、優秀な研究者も多数います。

復旦大学の卒業生は優秀な人材として各界から高い評価を得ています。就職氷河期といわれる近年でも本科卒業生の就職率は 95%以上を維持しているそうです。卒業生の 10%近くが政府官僚になっているほか、金融、弁護士、公認会計士などの分野でも高い就職率を保っています。



～開発援助班～

メンバー： 兼国、中尾、豊田

(A Comparison of China and Japan in Their Overseas Development Assistance)

1. 一橋大プレゼン概要

私たちは、

① 日本の対外援助 ②中国の対外援助 ③日本と中国の対外援助に関する共通問題点と解決策の3点について発表した。

①日本の対外援助

日本は、日本の援助が国際社会の平和と発展に寄与し、日本の安全と繁栄の確保につながる、という方針のもと対外援助を行っている。被援助国の自助努力を重視している。また、援助額の約60%がアジア向けである。

②中国の対外援助概要

中国は、自国は発展途上国であるという認識のもと被援助国と共同发展するという方針のもとで対外援助を行う。内政不干渉の徹底・パッケージ型プロジェクト(中国側が全部もしくは部分的にプロジェクトを実施する)が多い点の特徴である。地域ごとの援助額に占める割合はアフリカが46%、アジアが35%である。

③日本と中国の対外援助に関する共通問題点と解決策

共通の問題点として二つ取り上げる。一つ目は開発援助構造上の複雑さによる援助の不効率性である。解決策として日本は JICA により大きな権限を与え、援助実施をよりスムーズに行うこと、中国は対外援助の一括管理を行う機関を設置することを提案した。二つ目は現地のニーズに沿った援助が困難であること。解決策として日本に対しては現地の NGO と連携した援助を行うこと、中国に対してはパッケージ型プロジェクトを削減することを提案した。

2. 復旦大プレゼン概要

復旦大学は先進国の中国への援助と、中国の対外援助について、3つのパートに分け発表した。

① 先進国の中国への援助

中国への援助の主な出資元は、世界銀行・国連開発計画(UNDP)・日本・ドイツに分けられ、この4つのアクターの援助額は共通して1993年から94年にピークを迎えている。また95年までの援助資金の使い道は公的援助が最も多かったのに対し、それ以降は社会的援助に最も多くの額が割かれていた。

② 先進国が中国へ援助する理由

先進国が中国へ援助する大きな理由は、政治・防衛・外交上の利益、経済的利益、環境の面での恩恵の3つをあげていた。冷戦時のアメリカなどを例にあげ、国家の影響力を強めるために中国への援助することは外交上利益があり、また中国市場への参入に優位な状況をつくるという点、地球環境をよくするという点で、中国へ援助することは先進国にとって有益であると考えていた。

③ 中国の対外援助

中国の対外援助は2003年の1.5億ドルから06年の27.5億ドルまで増額しており、その大部分をアフリカ・ラテンアメリカ・東南アジアが占めていた。援助の内53%を政府支援投資が占め、42%を無利子借款が占めていた。また援助額の約半分が天然資源および農業に、残りの半分がインフラに用いられていた。

3. ディスカッション内容

開発援助班のディスカッションは、質疑応答形式で行われた。

HU→FU

①中国の目覚ましい経済成長を受け、日本では中国への援助を停止すべきという声がある。一方で、公式見解ではないが、中国への援助は暗に戦争の賠償と位置づけられる為、簡単にやめられないという主張もある。中国側からみて、日本が中国に援助を続けている理由は何か？

→ ここで歴史は問題にすべきではない。援助の要は、互惠の概念だ。日本は中国の経済成長の恩恵を受け、対する中国は日本の技術力で現在の技術不足を補える。（※中国は経済成長率に比して技術の成長率が低い/経済班発表参照）これによって相互援助、互惠の関係が成立するし、政治的にも良い関係を保てる。そもそも、中国の一人当たりのGDPは依然として発展途上国並みで、まだまだ日本の援助を必要としている。

②しかし、中国は経済成長の結果得た資本を国内でなく国外に投資し、アフリカを中心とする他途上国の援助に利用している。何故、自国を差し置いて他国を援助するのか？

→ アフリカの多くの国は、途上国である中国よりも更に一人当たりGDPが少ない。日本が日本よりGDPの少ない中国を援助するように、中国もよりGDPの少ない国を援助するのは当たり前だ。短期的には自国を差し置いているようでも、長期的に見れば政治的にも利益になる。

③アメリカが中国へのODAを止めたことやその影響についてどう思うか？

→ たとえ金銭的な援助が停止しても、中国の求める「援助」は必ずしもお金ではない。むしろ、先進国の高い技術やノウハウが欲しい。医療従事者や医療技術の提供など、他代替手段で援助してくれればと思う。中国では、豊富な資源や労働力が経済成長に寄与してきた。日本やアメリカには、環境に対し変化する柔軟性や高い技術力がある。中国もその段階に移行すべきだし、その先導者として両国に倣いたい。

FU→HU

①パッケージプロジェクトの何がいけないのか？日本も、中国などに紐付き援助を行ってきたし、それによって恩恵をこうむったこともあるのではないかな？

→ 確かに日本も紐付き援助（タイド・プロジェクト）を行ってきた。日本の援助で過去に指摘された問題は、使用する機器や部品が余りに高性能で現地に適したものでなく、一定の期間を経て消耗するとその取替え部品として再び日本製品を使わざるを得ない、というもの。これに対し、中国が行う援助では、援助機関に「中国人労働者」をも含み、現地に中国人コミュニティを作ったり、現地の労働者を過剰に搾取したりしている点が問題視されている。今、日本は援助の在り方を改善する為、より現地に根付きやすい援助を模索している。互いに、自国と被援助国双方にとって利益のバランスがとれた援助を考えていかなければならない。



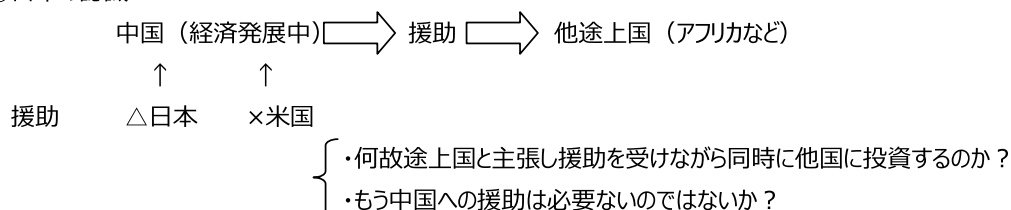
②中国では、日本の経済成長に倣うと同時に、日本の「失われた10年」について熱く議論されている。日本人学生として「失われた10年」についてどう思っているか？

→ 正直、「失われた10年（もしくは20年）」を生きてきた私たちは、現実的な意見が持てていないのかもしれない。「あの頃は良かった」と振り返る「あの頃」を覚えている親世代と異なり、私たちはちょうどバブルが弾けた年に生まれた世代。何が良かったんだろう？何が違ったんだろう？と疑問に思う間もなく、失速したとはいえども「高い技術力」の恩恵を受けて育ってきた。今の私たちには、これから何をすべきだ！といった向上心やエネルギー、その担保となる保証が無いのかもしれない。エンジンのかかっていない世代であることを改めて自覚した。

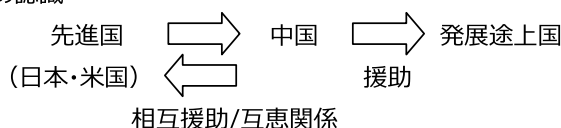
（この考え方、この一週間を通して変わっていきました！）

★まとめ★

①日本の認識



②中国の認識



- ・自国より困っている国は援助しなければならない。
- ・低い金利政策をとる国は、利子の高い中国に投資することで利益を得やすい。
- ・米国では現在中国との外交政策に重点が置かれており、相互協力を通じて関係が良好になる。
- ・中国の技術不足による環境汚染が改善されれば、近隣諸国の利益にもなる。



4. 感想

私が最も印象に残っていることは、復旦大学の学生から「失われた 10 年を過ごしてきて、どのように感じたか。」という質問をされたことです。この質問を受けた時、私ははっきりとした回答を返すことができませんでした。なぜなら私は失われた 10 年を生きてきて、特別不幸さや、不自由さを感じたことはなかったからです。しかしこの問いを帰国してよく考えたときに、この質問に応えられなかった本当の理由は、私が日本の若い世代が抱える問題（若年層の雇用問題など）に注意を払っていなかったからではないかと感じました。他国が抱える問題には自然と目が向くの、自国の抱える問題には目を向けていなかったということにショックを受け、反省しました。

社会学部二年 豊田 美生子

復旦大学の学生が英語での会話に困らない英語力があることに自分との差を痛感した。これから世界を舞台に活躍していくとする意識の高さがわかった。また、こちらがどのような質問をしても一人ひとりがきちんとした自分の意見を持っており、普段からの問題意識の高さもうかがえた。ディスカッションで特に印象的だったのが、復旦大学の学生が中国を発展途上国として認識していたことだ。中国の経済発展の要因は労働力の安さにあり、技術力ではないというのが理由だった。中国は世界第 2 位の経済規模にまで発展したが、中国の将来を担う学生の生の声を聞き、GDP だけが「豊かさ」を測る指標ではないことを改めて感じた。

社会学部三年 兼国 綾香

中国側、少なくとも復旦大学の学生が、自国の対外援助の現状を思った以上に把握していることに驚いた。学生でありながら、目覚ましい経済成長と発展途上国であるという表裏をなす主張を巧みに利用しているという印象さえ受けた。ここで述べられた「互惠」の概念には自己中心的な部分や矛盾があるのではないかと考えたが、「それが外交」というのもまた真理かもしれない。「日本だって得してる部分あるでしょう？」といわれた時には、返答に窮してしまった。

そもそも文化的価値観・認識共有の乏しい地点から議論するのはとても難しかった。議論の間に何が正しいのか、また自分の価値基準に自信が持てなくなってしまった。こちらの知識不足もあり、説得力を持って指摘できなかったことが悔やまれる。

中国の国内格差は極力自ら解決すべきではないか、何故そこで他国をあてにするのか。中国側としては、何よりも技術力の不足が理由である。一方で日本や他国の本音には、少なからず、「労働力、資源、経済力のある中国が技術力まで備えたら…」といった恐れもあると思う。このギャップを少しでも埋める為に、開発援助においても情報透明性や信頼の確保が叫ばれる。

trust and goodwill（中国側のメンバーの一人にとっても良い言葉だと気になってもらった。彼が将来の中国を変えるかもしれない…!?）の強化によって認識のひずみが薄れることこそ、双方にとつての「互惠」に繋がる第一のステップだと信じている。

法学部三年 中尾 実貴

～教育班～

メンバー： 内野、津覇、平川

(An Introduction to Education in Japan :

With a Comparative Analysis of Education in China)

1. 一橋大プレゼン概要

私達のプレゼンは3つのパートに分かれている。

1つ目のパートは基本的な日本の教育構造である。日本は小学校(6年)、中学校(3年)、高校(3年)の所謂「6・3・3型」であり、義務教育は9年間である。そしてその基本構造を紹介した上で、私達は便宜上3つに分けて、日本の大学受験制度を紹介した。中国と日本の大学受験制度には大きな違いがあり、私達にとっては当たり前だが、復旦大学の学生は科目の多さ、また様々な方法があることに驚いていた。

そして2つ目のパートでは日本の教育における悪い点と良い点を紹介した。悪い点としては、「知識の詰め込み」「予備校、塾の普及」を挙げた。日本では暗記重視の傾向が高い。また日本の学生は、小学生、中学生が半数、そして高校生は4分の1が予備校、塾に通っている。一方良い点としては、「義務教育における教育の機会均等」を挙げた。もちろん日本でも完全に機会均等が実現しているとは限らないが、ここでは中国と比較して紹介した。

最後に3つ目のパートでは、中国、日本の両国における教育改善に向けて何をすべきか考えてみた。そこで中国の課題として「教育の機会均等」を目指すことを提案し、また逆に日本は「知識の詰め込み」「予備校、塾の普及」をどうすれば改善できるのか、復旦大学の学生に問うた。

以上が大まかな一橋大学のプレゼン概要である。

2. 復旦大プレゼン概要

復旦大学のプレゼンテーションも3つのパートに分かれていた。

1つ目のパートでは復旦大学の人は基本的な教育システムを説明してくれた。中国も日本と同じく小学校6年・中学校3年・高校3年の「6・3・3型」であり、義務教育も日本と同じ9年間であるということだ。また、1986年に施行された義務教育法が確実に浸透してきており、99%の児童が小学校に、そして80%が小、中学校ともに通学するようになったようだ。一方で、高校への進学率も最大となっているが、43.8%と先進国に比べると低いということ。大学校に関しても、2236校、進学率19%と在学生数2000万人と各々の統計で過去最大の数字を出しているが、大学生数の増加により、大学生にとって就職活動が厳しくなっているようである。

2つ目のパートでは、中国政府の投資、教育に関する政策を説明してくれた。現在、中国政府は教育部門に前年比20%増に及ぶ投資をしており、教育への予算の内訳は年々1%増加しており、その総額は1000億ドル以上になるようだ。中国政府は教育への投資目標として、その総額がGDPの4%ほどになることを目指して財源の移行を進めているということ。また、中国政府は経済的に、大学に行けない人に対して、奨学金や、勉強と仕事を両立する制度の確立、特に貧しい人に対する補助金の支給や、授業料の免除、給付金の支給を行うことで依然として教育格差はあるものの、教育機会の均等化を進めているということを述べてくれた。

3つ目のパートでは、中国の留学生と、外国からの留学生数の動向に関して説明してくれた。まず初めに、学部生の留学が進んでいて、その原因が大きく分けて三つあることを述べてくれた。まず1つ目が、海外への留学が、国内の大学の入学試験を受ける代替案として注目され始めたこと。そして2つ目が、海外に留学させることで現地の環境に早い内から子供を馴れさせることができると考える親が増えたこと。3つ目として、中国で富裕層が増え、留学に行かせる余裕がある家族が増えてきたこと。この三つが学部生の海外留学を促進しているようだ。また、海外に留学に行った学生の内、半分以上が帰って来ず、優秀な人材の流出が問題にもなっているということだ。次に、中国への留学生に関する説明をいただいた。中国への2010年の留学生は194カ国から265,090人と、2009年の240,000人と比べると10%近く増加しているとのことで、中国政府側も2020年までに50万人の留学生を呼ぶことを目標とした教育政策を打ち出しているようだ。

以上が復旦大学の大まかなプレゼンテーションの概要である。

3. ディスカッション内容

学校の制度について、受験を軸にした競争の状況について議論した。学校の制度については、初等、中等、高等教育それぞれの年次や授業形式は日中ともにほとんど同じである。しかしながら、日本では全国共通のカリキュラムのもとで公立学校では均一的な教育が受けられるのに対し、中国では農村部と都市部で教育の質のレベルに差があることがわかった。受験競争の状況として、日本と中国の都市部の子どもたちは幼いうちから塾と学校に多くの時間を割いており、グループの1人は小学校時代一日15時間勉強していたこともあったらしい。

勉強のほか、親からの強い期待が子どもに負担になっているといった体験談も出た。特に一人っ子政策のもとで中国の子どもたちはより多くの期待を背負っているようだった。

大学の状況では、どちらも就職が非常に厳しい状況で、高学歴でも仕事がないのが現状だ。特に中国ではその傾向が激しく新卒の就職率は60%ほどだという。また、中国では急激に大学生の数が増え教師の数が足りない、競争がさらに激しさを増していることが問題点として挙げられた。

総じて、両国ともに競争激化のなかで児童の無気力や受動的な学習姿勢が染み付いてしまっている状況が憂うべきで、また国際社会での競争で戦うための教育の変換が求められると言う結論に至った。



4. 感想

上海の学生の意見を密に聞けたのがとてもよかった。このディスカッションのために調べていた学校の状況とはまた違った体験が聞けて、中国国内の多様さや複雑さを感じた。今回は日中ともに高学歴と呼ばれる層ということもあって受験競争に必死だった状況を共有できたが、少なくとも学習時間や幼少期の生活を聞く限りでは中国の方がストイックな生活のようだった。またそのような状況を将来につながると自ら意義づけし受け入れている意欲的な印象も受けた。もっと教育に対する捉え方や日中だけではなく世界規模で見た時の教育の在り方まで議論できたらよかった。

社会学部四年 津覇 ゆうい

復旦大学の学生との交流において一番強く感じたことは、お互い辛い受験教育をくり抜けてきたわけだが、日本の学生の方が勉強以外の様々な活動に従事していることである。今日の日本は所謂「ゆとり」の狭間の中で揺れており、社会人としての「知識」と、それを実社会で応用していくための「人生経験」のバランスに悩み続けている。復旦大学の学生に中国の受験教育の現状を聞き、その「知識」と「人生経験」のバランスについて改めて考えさせられた。教育もグローバル化する中、このバランスは両国の大きな課題の1つではないだろうか。

経済学部二年 平川 星座

私はこのディスカッションを通じ、中国の大学生の優秀さを目の当たりにして「大学」の意義について考えさせられた。日本の就職制度と違い、中国の就活では選考時にその職種に適した知識があるか、優秀な成績を収めているかが確認される。そのためにも、中国の大学生は朝から夜遅くまで勉強をしているそう。それに対し、日本の学生は、就職活動においてそのような成績は求められず、印象と性格のみが求められる。そのためか、日本の学生の多くは、学生生活を遊びに費やし、本学が疎かになる傾向があると思う（特に文系）。また、日本の大学のカリキュラムに関しても社会指向の講義が少ないと感じる。社会では、人と人がぶつかりあい、交渉したり、意思疎通を行う場であると仮定するなら、ハーバード大学ではないが交渉術の授業を設けたり、コミュニケーションやリーダーシップ、英会話に関する授業を必修にする必要があると思う。大学が、社会に適した人材にもなれない上に、ただ遊び呆けているだけの場ならば私は、大学に行くよりも、高校卒業後に働きに出た方が良いと思う。この現状を打破するには、内部から学生の意識を改革するだけではダメだ。文部科学省、並びに大学の意思決定者が「大学」の意義を見直し、外部から働きかけない限り、有能な学生は生まれにくいだろう。復旦大学の優秀な大学生を目の当たりにして、このことを考えずにはいられなかった。

商学部四年 内野 琢郎

～交流感言～

(A description of the student's impressions from Fudan University)

On 12th September, a sunny day, we have 11 friends from Hitotsubashi University, to participate in the Fifth Sino-Japanese Students Symposium. The topic is "Similarities and Characters of China and Japan-- from an economic and educational perspective", also three sub topics namely: "Development assistance", "Education system both in China and Japan" and "Comparison of the economic growth between China and Japan".

During the four-hour symposium, we have fully discussions on all the topics, and we really enjoy the time of communicating with Japanese friends.

The young girls and boys are all so lively and lovely, and smart. They learn quickly and think comprehensively, they just entered into college, and still have enough time to learn more, to improve themselves and enjoy their college lives, like band shows or symposium of this kind or even traveling all around the world.

I strongly believe every one of them will have a bright future.

—— Dang Yue

● Group of Development assistance

The communication between students from Hitotsubashi University and students from Fudan University has give me a opportunity to exchange ideas and experience with Japanese friends. It's stunning that we both find we have so many similar things, such as education, economic problems etc. Time pasted soon and I felt a little bit pity that time was too short to talk more. The communication has left a pleasant memory for me!

—— Shao Bingjing

Communication between Japanese and Chinese students expressed me a lot. I hope there could be more discussions and understandings in the future.

——Xiong Bingzheng

I've learned a lot about the university life of Japanese students. Also, I was deeply astonished by their serious attitude towards academic studies. By exchanging views, we all happily found that we had so much in common. I really hope that such exchange program can be held regularly.

—— Ning Shuyuan



● **Group of Education system both in China and Japan**

China and Japan are geographically separated only by a relatively narrow stretch of ocean. We were looking forward to meeting with friends on another side. Through the symposium, we were so glad to be with friends from Japan, sharing opinions and understanding born of great mutual respect and friendship. Although time and distance will separate us, we still remember the purest friendship and blessing.

—— Ling Yi

Being a member of the team was a coincidence at first and at last the coincidence turned out to be a memorable experience. I have told some of my friends about our discussion in the afternoon and our tour to Wujiao Square after dinner, and they all have moved by my pride in it. To see you, my Japanese partners and friends, maybe not that easy. But I do believe nothing's gonna change our sweet memory shared by all of us. I am looking forward to getting in touch with you from the bottom of my heart.

—— Li Siyi

It was so great to have such a wonderful symposium, and you impressed me with logic and intelligence. All of you have shown us insightful understandings of the similarities and characters of China and Japan. I look forward to the next time we meet.

—— Zhou Yang





● **Group of Comparison of the economic growth between China and Japan**

Inter-colleges exchange is a significant step to seed a big tree of inter-communication between Japan and China. To be with Hitotsubashi University fellows is to be with future genius of Japan!

—— Zou Yi

The friends from Hitotsubashi University are really nice and talking to them is such a pleasant experience that I will cherish for the whole life. What impressed me most is their rigorous attitude on research. I really hope in the future we will have chance to hang out and communicate things in all areas of life.

—— Li Wanzhen

We had a unforgettable memory with the Japanese students. They have strong analytical skills and global views. Hope there will be more programs like this.

—— Zhuang Da

This Symposium was a great opportunity to enlarge my view and get more knowledge. I wouldn't pretend that I was an economics major, but this discussion did give me a vague sense of how economy is like both in Japan and in China. I'm surprised by how the 22 of us from very different backgrounds communicated so well about such academic topics, worked together and came up with wonderful ideas. I have hardly been in such amazing community, which always reminds me about how small the world actually is.

—— Windy Liu





～Photos at Fudan University～

